

郷土誌

昭和32年

鳥取市立散岐小学校

文化の部

1 学校沿革史

2 新聞ラジオの普及状況

3 進学状況

4 年中行事

5 迷信

一月の行事

もちっ
餅搗き

十二月の終わりにになると、お正月の餅つきをする。前は近所の人達が集まって、広庭に大きな臼を置いて、小さい杵を持った四人の男の人が鉢巻をしめて、かけ声も勇ましくつくくと、その音は辺りに響きわたって、お正月を楽しく待つ。その日は、『うす元』といって、挽きたての餅に小豆をまぶり近所の家配ったものだ。

つきしまう時は『あき方』といって曆にあるが、何のさしつかえない方を向いてつく人とこねどりする人が「千石万石やれめでた」と歌い、これを三遍に区切って歌いながら、つく人はうすの外側をきねで打ち、こねどりの人は餅を臼の中で持ち上げて打ちつける。また、つきたての餅は一部分空気を含んでふくれることがあるが、これを福の神といってその部分を神様に供えることもある。今はこのような事は見られなくて、昔使った小さな杵は、何本か物置きなどの隅へかけられたままになっている。今頃は大きい杵でつき女の人がかねどりするのが大部分である。餅つき機でするのも近いことであろう。

としかぎ

歳飾り

大晦日（一年のしまいの日）には、家の内外の神棚を掃除してしめ縄を張る。大戸口には、みのあみのしめ縄に、みかん、大豆がら、また大根、木炭などをそえて飾る。家によって違うけれど『歳神様のあし』といって、米俵一俵を神前に置き、その上に新しいむしろをしいて色々なお供物を置く。

また『歳飾り』といって、一斗ほど入る桶にしめ縄をかざり、その中に白米一升二合（うるう年は一升三合）大鏡餅・田作・串柿・かち栗・小餅を十二個か十三個、また大根一本・御神酒・銭を十二又は十三を入れて大歳神にお供えするのもある。家によってはもう一個同じものを作って倉の神様にお供えするのもある。

大晦日のいろいろな神祭りがみんなすめば、豆腐を切つて串にさし、味噌をぬつて田楽を作る。これは貧乏神を追い払うためという。この様な事も昔は大抵どの家もしていたのであるけれど、近年はする家の方が案外少ないようである。

元日

歳男（正月のいろいろなことをし、神様をまつる男の人）は朝早く起きて松明を点し、しめ縄をはった新しい桶をもって若水をくみに行く。この水でお茶を煮て泡立て、一番先に大歳神にさしあげる。

朝の食事はみんなこの歳男が用意する。二日も三日も同じ事である。

朝食がすめば、樵初めに山へ行き、樫又は栗の木を伐つて帰る。この木は後で五月の田植えの時『ワサウエ』といって神様に供える物を炊く時に使う。

樵初めから帰ると、木の鉢に米を一升二合、又は一升三合をもりついて白くする様子をして神様に供える。今度は朝いわいといって、家内中が集まって三宝を頂き串柿を食べる。三宝には、うらじろ、ゆずり葉の下じきの上に白米、干柿、田作、かち栗、だいだい又はみかんをおいて大歳神にお供えしている。次は、歳男より次々に神酒を飲み、煮豆、かずの子などをたべて朝の行事を全部終わる。朝食、朝いわいがすめば、みんながよそ行きの着物を着て氏神様に参る。そうして普段から心安くしている家に年の初めのあいさつに行き、ごちそうを頂いたりする。

書き初め 縫い初め 買い初め

二日は書き初めといって習字をし、大歳神に供える。縫い初めは紙で袋をぬい中へ入れてお供えし、この米は『ワサウエ』の時炊いてお供えする。店ではお客さんを待ち、昔はお客へ餅などサービスする店もあった。

買い初めには起き上がりこぼし（だるまさん）を買って歳神にお供えする。

よっか

四日

四日は『坊主礼』の日で、お寺では供の人を連れて檀家の家を回る。それで普通の家では、四日にはよその家へ行ったりしないようにしている。

なのかししょうがつ

七日正月

正月七日はお粥に餅を入れて煮る。神様へお供えし、みんなが食べる。本当は、せり、なづな、ごしろう、はこべ、ほとけのぎ、すずな、すずしるの七草を病気をよけるためにお粥の中へ入れたが、今頃はせりだけのようである。「とうどの鳥がわたらぬ先に七草そえてほうほう」と歌いながら、まな板の上でせりをきざむこともある。

とんど
左儀長

正月十四日（十五日のところもある）『左儀長』として、村の所々にしめ縄などを持ち寄つて焼く。

青竹がパンパン弾いて燃え、子どもたちは燃えさかる火に書き初めを燃やし、高く上がれば書き方が上手になると喜ぶ。又この火でかみ餅をあぶってしまったておく。これをどんどろけ餅といって、初めて雷を聞いた日にみんなが焼いて食べる。これは雷による災害を防いだものであるこの日に、小豆粥を煮てカヤのはじで食べる事もする家がある。

としび
歳日

正月元日より次々にくる十二支（子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥）の日にあたる家内の者には、その日の昼食には、特別ごちそうをして、みんなも一緒に食べる。

せつぶん
節分

十二月又は正月のうちに節分があつて、その日は田作（ひいわし）の頭を柵の小枝にさして、家中の入口にさし鬼の入るのを防ぐ。この地方では豆まきはあまりしないようである。入口にさした魚の頭を食べれば、頭痛が治るともいう。

二月の行事

亥の子いこ

二月で一番初めの日を『亥の子』といい、餅をつき、頭つきの魚を添えて神前に供える。二回目の亥の日を二ばん亥の子といって、この日も又神様に供える。

これは、昔から猪（いのしし）の野荒らしに困って防ぐために、神様にお祈りしたものである。

三月の行事

雛祭り

三日は『雛祭り』としてみんなが祝う。女の子が生まれたりお嫁さんが来ると、親類、その他の家でお祝として雛をおくつたりする。二月の終わり頃から、内裏雛、主雛、人形、その他色々美しく飾り、菱形餅やその他ごちそうを供えている。

この日、子どもたちはよそ行きの着物を着たりして家々を回り「使とぎ」をもらいに歩くことが昔はあつたけれども、今はあまりしないようである。雛は「耳に変えても 田螺が食べたい」といわれるとか。その日は必ず田螺をお供えする。

内裏様には耳の付いていないのが多い。

春の彼岸（ひがん）

三月十八日から二十四日までを『春の彼岸』といって仏さんをお祭りする。二十一日を中日といって、家守の人が墓参りをし、だんごを供える。『暑さ寒さも彼岸まで』といって、だんだん一日が長くなり暖かくなってくる。

鳥取の覚寺の『摩尼山』にお参りするものこの彼岸の間が一番多いようである。

四月の行事

花祭り又は灌仏会

かんぶつえ

この月八日は『卯月八日』といって、お釈迦様が生まれられた日をお祭りする。

お寺では、花のお屋根の小さなほころの中へお釈迦様の像を置き、甘茶を頭からそそいで拌み、子ども達はやかん、びん、水筒などを持って甘茶をもらう。

五月の行事

たんご せつく
端午の節句

五日は端午又は『菖蒲の節句』といって、日本国中行われる。男子のある家はのぼり、鯉のぼりを高い竿に上げてお祝する。男子が生れると親類や心安い家からのぼりをおったりする事は、女子のひな祭りと同じことである。

のぼりは、前にはその家の紋を染めて黒い二本筋が入ったものであったが、今は色々な模様を染め抜いたのがはやっている。風にハタハタと勇ましく音を立てるのぼりを見るのは、すつきりとしたいかにも気持ちのよいものである。

この前の日より家々の屋根には、しょうぶ、よもぎ、かやを小さな束にしてさし、『菖蒲湯』といって風呂水に右の草を入れて入浴する。又牛の角にしょうぶをかざす家もある。しょうぶは、薬草の一つであるから、これをつけると毒消しになるといふ。

この日家々では、笹巻き、柏餅といって、笹や櫨、その他の木の葉に小豆あんを入れたり、味付けした団子を巻き込み蒸して食べる。

六月の行事

うし
ひ
丑の日

旧の六月中に土用をむかえる。『土用』というのは、十八日を一区切りとしたもので、一年に四回ある。この日は百種の草や木の茎や葉を風呂につけて入ると薬湯で色々な病気によく効くという。

また、この日に山や野に生えている薬になる草（どくだみ、げんのしょうこ、その他）を取って来てよく干し、しまっておけば効き目が多いという。この日、うなぎを食べると腹の虫がいなくなるということもあるが、この辺りはあまり食べないようである。各地の温泉は大変な大入り満員である。

まんどろ
萬燈

二十二日には『萬燈』といって、見晴らしのよい田のあぜや山へ集って竹竿の先に松明を点し、これをならべ立てて（愛宕権現）をお祭りする。夏の夕方から夜にかけてずらつと並んで赤々と燃える火は、なんとも言えず勇ましく厳かな気持ちになる。なお家々でも松明を点して拝む。

七月の行事

たなばた

七夕

日本国中どこでもする事であるが、所によつては大変珍しい事をするものもある。七夕というのにこの地方では、六日の夜祭るのも面白い事である。六日の夕方近く、男竹の笹の葉へ七夕の歌やその他の事を書いた短冊を吊して、桐の葉にきゅうり、すいか、かぼちや、なす、その他色々な物を供えて牽牛星、織女星を祭る。

七日の朝、子ども達はこの竹をいくらかの供物と一緒に川へ流す。この短冊を頭の髪へはさめば頭痛が治るといふ。六日にはよくお墓掃除をする。

うらぼん

宇蘭盆

十三日より十五日までを『宇蘭盆』といつて仏さんをお祭りする。十三日には仏壇を掃除して花を立て、香を焚いて色々なお供物をする。庭に新しい竹を四本立てて四隅の柱とし、麻がらをあらそで結びつけて棚を作りこれに蓮の葉をしいて色々な供物をする。これはどの仏の魂も祭ろうとするためであろうか。

この前の日頃、お寺では各家々の仏を拜みお経をあげる。子どもも大人も新しい浴衣や服、下駄などをつけて踊りを見たりして夏の夜を楽しく過ごす。

十四日

この日は家内中お墓参りをする。はすの葉をしいて、その上に洗った白米、うり、茄子、枝豆などをきざんで混ぜたものを供えて線香を焚き、花を立て水をそそいで拜む。新しい竹で作った花立に花をさすことはどこでもすることである。

また、別にみそはぎ二、三本を紙で巻き、長いさやの豆を供えることがあるが、一つはほうきといい、一つは枝ともいう。新しく死んだ人のある家には初盆といって、親戚や心安い家から燈籠や提灯などをおくることがある。

又一頃しなかつたように思われる盆踊りもするようになって、踊る人は揃いの格好をして、遠くの方からでも初盆の家へ来て仏さんに踊りをお供えする。

八月の行事

八朔 はっさく

一日を『八朔』といつて、仕事を休みあわ餅をついて神様に供えていたが、今頃はだんだんしないようである。

彼岸 ひがん

この月に秋の彼岸を迎えるが、全て寺の彼岸と同じ様な事をする。

つきみ
月見

十五日を『中秋の名月』といい、色々のお供えをして月を祭る。町の人の様にあまり丁寧にしないようであるが、団子を食べ、この日から里芋を食べる。

十月の行事

いこ
亥の子（いのこ）

十月の亥の子の日の事である。この日餅を食べると、色々な病気から逃れるといつて、餅をつきお供えして食べる。また、この日にこたつを出せばこたつによる火事がないといつて、亥の子の日にこたつを出す家もある。

十一月の行事

とうじ
冬至（とうじ）

この月によく冬至をむかえる。昔からこの日は大変良い日として、色々お祝いした。小豆餅をたいて神様に供えゆず湯をして入浴した。これは病気を追い払うという。また、この日こんにやく、かぼちやを食べる。

十二月の行事

ついたち
朔日

この日を『おどがついたち』といって、小豆飯をして祝う。茄子、うりなどの味噌づけを食べる。

ようかぶ
八日咲き

この日は昔から雪や風が激しくて大吹雪の嵐になることが多い。また、この日は『嘘つき豆腐』といって嘘を言った者が豆腐を買って人々に食べさせるという。

鳥取覚寺の摩尼山がお参りする人でにぎやかいのもこの日である。

すりこ木かくし

二十三日の晩は『すりこ木かくし』といって、小豆粥をしたりぼた餅をしたりする。

昔『弘法大師』という偉い坊さんが寒い冬の夜、一件の貧しそうなお家に入つて

「今夜泊めてください」

と頼まれた。貧乏なおじいさんとおばあさんは

「お泊めしてあげたいけれど、何も食べるものがありません」と悲しそうに言った。

外を見ると向こうの田んぼのいなはぜに蕎麦が干してある。あれはよその家の蕎麦であるが、せめてあれを少しでももらつてきて、このお腹をすかせていらつしやるお坊様に食べさせてあげましょう。こう思いついた。

おじいさんは、雲の中の田んぼの蕎麦を持って帰り、たいてお坊さんに食べさせた。へとへとお腹をすかせていたお坊さんは嬉しそうに食べる。

ところが困つた事にこのおじいさんは足の指が無くて、まるでこの木の様につるつるとした足である。その足で雪の上を歩いたのだからよくわかること。あのおじいさんがそばを取つたのだな、とひと目でわかる。でもお坊さんをお助けしたのだからと、その夜は寝て朝起きて見ると、これはこれは、夕べのうちに雪が降り積もつてみにくい足あとはすっかり見えなくなっていた。

おじいさんの親切な心をほめて、弘法大師が夜の中に雲を降らせられたのだろう、という話も伝わっている。

庚申こうしん

十二月の行るとは決まっていない。一年に六回、または七回あつて庚申（かのえさる）の日を祭る。

猿田彦大神（さるたひこおおかみ）または青面金剛（せいめんこんごう）といつて、青い顔をして手が四本ある仏を祭る。七種類の花とお料理をお供へする。

この他にもまだ年中行事として数多くあるが、この行事を思うに私たちの祖先の人々が文明に恵まれない昔、日夜あらゆる苦勞をして働き続けながら、神や仏を丁寧にお祭りし、何事をするにもまず神や仏に祈り、お祭りをしてから自分達の事にかかる。村の人がみんなの事の為に一つになって、仲良く和やかに暮らしていた様子がよくわかり、ひとりでに心から頭が下がる思いがする。

各部落の行事かくぶらく ぎようじ

変わった事では、和奈見では五月五日の笹巻きをしない。氏神様が笹の葉で喉を突かれたからといって、しないのだそうだ。

水根では六月一日の芝草という事をする。

六月一日は昔からその日が来るまでは、野山の草を刈らないと言うことになっている。この日は朝と昼と晩それぞれ一荷ずつ、合わせて三荷の草を刈っていたのであるが、今頃は朝早くから弁当持ちで遅くまでとにかく人に負けずに沢山刈ろう一生懸命である。

刈った草は主に水田の肥料にする。

迷信めいしん

嘘のような、本当のような。嘘だと笑ってみる癖に、何だか本当のようだとも思ったりする昔からの言い伝えである。

- 墓に手向けた酒をつければ、皮膚病（主に田むし）が治る。
- 水根のかへいじばか。これはよその町や村にも知られているとみえて、瓶のような物をぶらさげた人が参るのをよく見かける。
- さいの神に大きな草鞋を供えると、足の痛みがなおる
- 水根、小倉、山上でいう土用の丑の日に温泉へ入ると、病気にかからぬ。この日取ったよもぎで作ったもぐさは特別よく効く。
- 巳の日には、灸を据えない。
- 山の神の日（旧正月と十月十九日）へ山へ行くと家へ帰れぬようになる。
- 正月二日、朝早く雨戸を開けておくと、毘沙門天という神様が福を授けてくださる。
- 正月二日の夜、おり船を床の下に敷いて寝ると、夢で運がわかるという。船には『なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな』と反対でも同じく読める詩を書くといい。
- 足の指の二番目が親指より長い子は、親よりいい暮らしをするという。
- からすなきが悪ければ、近い中に死ぬ人がある。
- 鶏が夜鳴くのは悪い知らせである。
- 梟の鳴き方で明日の天気を知る。

迷信はこの他数多くある。原始時代の今日、思えばただおかしいような言いぐさであるが、また不思議によく当たる事の中にはあり、昔からの言い伝えとして放っておけない妙な事でもある。

宗教

かめおざん まんぶくじ
亀尾山 萬福寺

水根、尾上のバス停留所から右へ山の下はかなり急な坂道を百メートル程登れば、また、かなりのきだはしがあり、古風に静かな本道くりが見える。近年、青年団の一夜講習がよく知られるが、まことに人里をやや離れたよい修養の場である。お寺の出来た年月日はよくわからないが、一夜火事があったようである。本尊（そのお寺の一番大事にお祭りされている仏様）は『正観世音菩薩』宗旨は『古義真言宗』本山は『高野山金剛峯寺』である。檀家は百三十戸あまり、ご本尊を祭る日は七月十七十八日である。今の住職は、十五世代の大森宥天氏である。

しうんざん えんじようじ
紫雲山 圓淨寺

佐賀公民館から八日市の方へ約百メートルも行けば、小さな四つの角があり、左へ八十メートルも行けば趣のある枝垂れ桜の長い枝が風になびいている。周りの稲田の中に、本堂の大きな瓦屋根がくつきりと印象的に、秋は裏の柿が紅葉して見事である。昔は春ともなれば、門前の枝垂れ桜の下でにぎやかに花見をしたという。三百年あまり前に正西というお坊さんが建てられたものである。本尊は『阿弥陀如来』宗旨は『浄土真宗』本山は、京都の本場、『本願寺』檀家は四十戸あまり、信者が二十戸ある。お祭りの日には『親鸞聖人報恩講』という日がある。今の住職は佐々木義憲氏で、第十二世代である。

ひやくじょうざん だいぎ

百丈山大義寺

佐貫、中土居、大義寺山のふもとに、公孫樹、枝垂れ桜の太木、その他の木々の間から本堂、栗の瓦屋根が見える。緑鮮やかな春夏、美しく公孫樹色づく秋、雪の冬。つるべのきしむ音が時折聞こえ、朝夕おつとめの鐘の音も流れてくる。このお寺でも青年団の講習が開かれる。建てられた年月日はよくわからない。天正十八年二月十四日、戦争のために焼けて無くなっていたが、また建てられた。宗旨は『禅宗曹洞派』本山は『永平寺』である。本尊は『地藏尊』である。今の住職は三十一代の放牛氏である。

てんりきょう やかみせんきょうじょう 天理教 八上宣教場

佐貫、東土居の一番端（八日市側）に大きな建物が並ぶ天理教宣教場がある。宣教所は八頭郡内でも数が少ないので、祭日などは汽車、バスを利用してお参りする人が行列を作る。大正元年八月、創立を許可せられた。『天理教 北大教会 豊岡分教会 邑美支教会 八上宣教所』という。お祭りの日は、一月六日、三月二十三日、九月二十一日、十月六日。毎月六日は月次祭という。お説教の日は、毎月一日と十日である。今は河村ふでさんというおばあさんが所長である。

学校沿革史

一、散岐尋常小学校沿革史

本校は、元『佐貫尋常高等小学校』と称し、佐貫村宇戸村組合立にて『宇戸尋常小学校』（宇戸村大字水根にあり）及び『西山尋常小学校』（佐貫村大字下土居にあり）及び『西山尋常小学校』（佐貫村大字下土居にあり）で第五学年生以上を入れていたが、明治四十四年四月一日、西山尋常小学校を廃止して、その生徒全部を本校に入れ、大正六年七月三十一日、宇戸尋常小学校を廃止、大正六年八月一日に『宇戸分教場』となり、大正七年四月一日佐貫村宇戸村組合を廃止して『合併散岐村』と言うようになって同日校名を『散岐尋常小学校』と改められた。本校のこれまでの大体のあらましを書き上げてみます。

散岐尋常高等小学校

出来るまでの様子

明治六年に尋常小学校を設けた。その頃は校舎の設備も無かったから、散岐村の圓淨寺の本堂内を借りて勉強し、散岐村釜口村及び高福村の一部の児童を入れ、明くる年の七年になって和奈見村に支校（分校）を置き、八年に河原土居にも支校を造り、九年には釜口村にも支校を置いた。年が経つていくに従って、次第に本校は数が増えて狭くなり、十年になって本村の民家を購入し修繕を加えて校舎としたが、十二年十月になって学区の廃止のため、十二年の一月釜口支校を離して、それより五、六回の変更があり、和奈見の支校を合わせて、明治二十三年になってさらに校舎の新築をし、三十四年一月、河原支校を離して本校を学級編成として明治四十年度末になった。

本校の創立

明治四十一年佐貫村宇戸村組合で尋常科（六ケ年）高等科（二ケ年）を一緒におき、校名を佐貫尋常高等小学校と言い、西山尋常小学校（四ケ年）宇戸尋常小学校（四ケ年）修了者を第五学年に入れて、大正七年三月三十一日になる。

本校記念日

明治四十一年四月二十日転員児童共に整ったので記念式を挙げ、それより四月二十日を記念日と定めて式をす。

宇戸尋常小学校

本校は明治六年三月十二日の創立で、その頃山上村水根及び小倉村の児童を入れて水根小学校と言っていた。それは水根村にあったからです。明治二十四年四月、小学校令の改正によつて、宇戸尋常小学校と言うようになり、明治三十年三月から裁縫科が出来ていたが、三十六年四月からやめになっていたが、三十七年二月に、八頭郡佐貫村宇戸村組合立宇戸裁縫学校が造られた。

明治四十一年四月一日義務教育年限が延長されるようになり経済の上から第五六学年の教育事務を佐貫尋常高等小学校において、それより第四学年生までを入れて単式編成になったが、大正六年四月から第二学級編成としていたが、あくまで大正七年四月一日佐貫村宇戸村の合併した結果、散岐尋常高等小学校と改められたので、宇戸分教場となった。そして第三学年まで入れた。

散岐国民学校

昭和十六年二月二十八日、勅令第四百四十八号による国民学校令公布により、昭和十六年四月一日より散岐国民学校と言うように変わった。昭和十八年度より高等科第一学年を二学級として男子、女子を分けて学級編成をした。

村立散岐小学校

戦争が終わってから学校の制度が変わってきて、小学校は六年生までとなり、昭和二十二年（一九四七年）四月一日から村立となり、散岐村立散岐小学校というように変わってきた。

町立散岐小学校

町村合併が行われるようになり、散岐村も昭和三十年に隣村の八上村、国英村、西郷村、河原町の五ヶ町村の合併となつて学校も町立と変わり、河原町立散岐小学校と変わった。

二、校舎の建築

1、本校

イ、明治六年佐貫村圓淨寺本堂内を借りて学習を始めた。

ロ、明治十三年になって教室がいつぱいになり、佐貫村の民家を購入し、修繕して校舎とした。

ハ、明治二十三年にまた校舎を新築した。

ニ、明治四十一年佐貫村宇神田一反二畝を購入しこれに校舎を改築して校舎を増築した。そして九月一日に移転した。(八上高等小学校舎の一部を購入した)

ホ、明治四十三年、古い校舎の佐貫尋常小学校を移転し、改築して校舎を増築した。

ヘ、大正十二年九月二十六日散岐尋常高等小学校の信仰者が出来上がり、盛大な落成式を行った。

工事の報告

大正十一年九月十七日、本村会の議決によつて工事の設計は建築専門の田中技師に決まり、設計が出来るとすぐ許しの願ひを出し、大正十一年十二月二十八日に許可になり校地を拡張した。大正十二年二月十一日地鎮祭を行つて、二十三日工事の請負で地盤をし三月十二日建築工事も請負で話を決めた。その地盤工事は元の敷地五七〇坪五合、玄関平屋建てで建坪三坪五合、第二講堂平屋建てで建坪九八坪、第三、西側生徒入り口生徒入口および宿直室平屋建て、建坪一八坪二合五勺、第五西側便所および廊下平屋建て坪一六坪九合五勺で合計が三五〇坪、四合五勺で総工費が五万六千五百円。大正十二年六月二十三日に棟上式を挙げた。基礎工事は三尺以上八尺以下丁堀をして栗石とコンクリートで固め、また埋め立ての多いところは鉄筋コンクリートで硬くした。

校地の拡張

近く御真影法案殿の建築用地と将来の校舎増築等の關係を考へて、昭和八年四月一八日河原町田中金之助所有の土地六百七十六坪を購入した。

宇神田神社第七五三番田 一二五坪

全第七五五番田 一六〇坪

全第七五六番田 三九一坪

御真影法案殿の築造

昭和八年二月二十八日本村会で御真影法案殿造営の事が決まり、同年の七月一九日建築才法を決め、七月二十五日村会で設計師『前田徳太郎』氏に設計させた。設計は、本骨鉄網混泥土で銅板葺、建坪は柵垣外法三坪六七、柱真一〇八坪、八月一五日地鎮祭を行い、九月一日工事を始めた。工事中本村青年団処女会等が労力奉仕をした。昭和九年四月二十九日に出来上がり、工費は計七百三十円三十銭で同日天長節の良きお祝いとして落成式を行った。昭和二十三年倉庫と変わる。昭和二十一年八月入札して取り壊す。

2、分教場

イ、当分教場は元の水根小学校と言って、最初は万福寺を借りて校舎にしていた。

ロ、児童が年々増加して万福寺の場所ではいっぱいになり、校舎を万福寺の坂下に建築した。

ハ、年月が過ぎるに従って児童が増加したため、明治十九年五月現在の所に二階建ての校舎一棟を建て、七月十五日に落成した。それよりその日を学校記念日としている。

・設備は左の通り

総坪数一二五・五坪

(内) 創建坪数三三坪、教室健坪二〇坪、運動場三五坪、住宅八坪

・昭和十年になってから校舎はすでに五十年を経過して腐りかけており、またいっぱい児童が入りきれぬ状態になり改築することになり現在の所に千八百円あまりで工事を始め、昭和十年八月一日きあら三ヶ月後の十一月三日に落成した。

・分校校舎増築(昭和二十四年)

昭和二十五年九月宇戸分教場学級増加運動のため、山本村長と藤縄校長と二人で学務課長、庶務課長と地方課長へ陳情(頼み)に五六回出られ、昭和十五年十二月六日ついで知事に児童数が多い三ヶ学年の複式学級にして絶えず村民から教育の釣り合いに対して希望があり、また村政治の平和上学級増加の許しを願っていたところ許可になり、昭和十六年二月より二学級編成の分教場となり、転員一名を増やした。

・昭和二十三年 三学級三教員となった(形式上は二学級なり)

・昭和二十四年 三学級とみそめられて三教員となった。

三、歴代学校長

任命年月日		佐貫小学校		宇戸小学校	
任命年月日	氏名	年数	任命年月日	氏名	年数
明治三十八年九月六日	田淵克己	八ヶ月	明治三十三年九月二十二日	岩崎観瀾	六年二月
明治四十一年三月三十一日	青木保藏	一ケ年	明治三十九年十月六日	松尾上三	六十一年六月
明治四十一年三月三十一日	田淵克己	五ケ年	大正七年三月三十一日		
大正二年三月三十一日	米田和藏	五ケ年			
散岐尋常高等小学校					
任命年月日	氏名	年数	備考		
大正七年三月三十一日	米井多藏	二ケ年	郡内八東校ニ転任		
大正九年三月三十一日	森田勤吉	八ケ年	退職		
昭和三年三月三十一日	藤縄 愿		学校改正ニヨリ国民学校		
散岐国民学校					
任命年月日	氏名	年数	備考		
昭和十六年四月一日	藤縄 愿	十四ケ年	退職		
昭和十七年三月三十一日	前田信長	四ケ年	退職		
散岐小学校					
任命年月日	氏名	備考			
昭和二十一年三月三十一日	田村茂満	現在ニ引き続ク			

四、年代別教員数

明治四十一年度	佐貫 田淵克己 宇戸 松尾上三	三 名	昭和 十一年度	藤縄 愿	十二 名
大正 三年度	米田和藏	六 名	昭和 十二年度	全	十 名
〃 四年度	全	七 名	昭和 十三年度	全	十二 名
〃 五年度	全	七 名	昭和 十四年度	全	十一 名
〃 六年度	全	七 名	昭和 十五年度	全	十四 名
〃 七年度	全	分 校 と な る 九 名	昭和 十六年度	全	十三 名
〃 八年度	全	九 名	昭和 十七年度	森田勸吉	十四 名
〃 九年度	全	九 名	昭和 十八年度	全	十四 名
〃 十年度	全	九 名	昭和 十九年度	全	十 名
〃 十一年度	全	八 名	昭和 二十年度	全	十三 名
〃 十二年度	全	十 名	昭和 二十一年度	田村茂満	十四 名
〃 十三年度	全	八 名	昭和 二十二年度	全	十五 名
〃 十四年度	全	十 名	昭和 二十三年度	全	十四 名
〃 十五年度	全	八 名	昭和 二十四年度	全	十五 名
昭和 二年度	全	十 一 名	昭和 二十五年度	全	十五 名
〃 三年度	藤縄 愿	九 名	昭和 二十六年 度	全	十四 名
〃 四年度	全	九 名	昭和 二十七年 度	全	十五 名
〃 五年度	全	九 名	昭和 二十八年 度	全	十五 名
〃 六年度	全	九 名	昭和 二十九年 度	全	十四 名
〃 七年度	全	九 名	昭和 三十年度	全	十二 名
〃 八年度	全	十 名	昭和 三十一年 度	全	十三 名
〃 九年度	全	十 名			
〃 十年度	全	十 名			

昭和十八年度			昭和十五年度 (二月より七)			昭和十年度			昭和五年度			昭和二年度			大正十五年度			大正十年度			大正五年度			年度	学級数			
計			計			計			計			計			計			計			計			性				
女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計		
四十三	十四	五十七	三十八	十九	五十七	四十	二十一	六十一	三十九	十九	五十八	十八	十六	三十四	十七	十九	三十九	十九	十九	三十八	十九	十九	三十八	十九	十九	三十八	一	
三十七	十六	五十三	三十九	二十	五十九	三十六	十七	五十三	四十二	十九	六十一	三十一	二十	五十一	二十九	二十三	五十二	三十四	十四	四十八	三十九	十四	五十三	三十九	十四	五十三	二	
四十四	二十	六十四	四十	二十	六十	三十八	二十二	六十	四十六	二十六	七十二	二十六	二十	四十六	三十九	二十五	六十四	二十六	二十	四十六	三十六	二十	五十六	三十六	二十	五十六	三	
五十	二十七	七十七	三十一	三十三	六十四	六十七	二十五	九十二	五十八	三十三	九十一	二十八	二十六	五十四	六十四	三十四	九十八	二十八	二十六	五十四	六十六	三十四	一百	六十八	三十四	一百零二	四	尋常科
五十七	三十	八十七	三十	三十三	六十三	四十九	二十二	七十一	六十	二十七	八十七	二十八	三十二	六十	三十一	五十九	九十	二十八	三十二	六十	三十九	三十一	七十	二十九	三十	五十九	五	尋常科
六十	三十三	九十三	二十六	二十三	四十九	六十一	三十一	九十二	五十九	三十五	九十四	二十四	三十五	五十九	三十八	三十八	七十六	二十九	二十九	五十八	三十五	二十九	六十四	二十六	二十九	五十五	六	尋常科
六十	二十六	八十六	三十三	二十二	五十五	二十九	三十一	六十	四十四	八十一	一二五	三十六	三十一	六十七	三十三	六十四	九十七	二十九	二十九	五十八	三十五	二十九	六十四	二十六	二十九	五十五	分	
三百五十一	百六十六	五百一十七	三百四十五	百七十八	五百二十三	三百五十一	百六十六	五百一十七	三百八十九	百九十一	五百八十一	三百七十六	百九十八	四百七十四	三百七十六	二百	五百七十六	三百五十六	百六十九	四百二十五	三百五十九	百六十九	四百二十八	三百五十九	百六十九	四百二十八	計	
六十四	三十一	九十五	五十	十九	六十九	五十八	二十五	八十三	三十八	三十	六十八	二十八	三十	五十八	二十一	三十二	五十三	二十二	二十二	四十四	三十二	八	四十	二十四	十六	四十	一	高等科
四十九	二十一	七十	四十三	二十一	六十四	四十九	二十六	七十五	三十三	二十三	五十六	三十三	二十三	五十六	二十一	十六	三十七	十六	十六	三十二	十七	七	二十四	十五	十四	二十九	二	高等科
百十三	五十二	百六十五	九十	四十	百三十	百七	五十三	百三十	七十二	七十三	百四十五	四十九	五十一	百	五十一	三十七	八十八	三十八	十二	五十	五十四	十五	六十九	二十九	三十	五十九	計	
四百六十四	二百十八	六百八十二	四百三十八	二百二十	六百五十八	四百五十八	二百十七	六百七十五	四百六十一	二百二十四	六百八十五	四百二十七	二百三十七	六百六十四	四百六	四百六	九百十二	四百二十五	百八十一	五百三十六	四百七十六	百七十	五百七十六	四百七	二百六	六百六十三	合計	

五、学級数及び児童数

大正三年度			大正二年度			明治四十五年度			明治四十四年度			明治四十三年度			明治四十二年度			明治四十一年度			年度	
四			四			四			五			四			四			三			学級数	
計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	性	
不詳			不詳			二十七	十三	十四	二十八	十六	十二	二十八	十三	五	十六	七	九	二十二	十二	十	一	尋常科
						二十五	十一	十四	二十六	十六	十	十五	六	九	二十一	十三	八	十三	九	四	二	
						二十二	十五	七	二十九	十二	十七	二十一	十三	八	十三	九	四	十九	八	十一	三	
						三十	十四	十六	三十七	十八	十九	十二	八	四	十九	九	十	十五	五	十	四	
						五十一	二十	三十一	四十二	十七	二十五	四十三	十六	二十七	三十二	七	二十五	二十六	四	二十二	五	
						二十九	十三	十六	三十七	十六	二十一	三十九	十	二十九	二十六	四	二十二	二十三	四	十九	六	
百九十八	九十一	百七	百八十九	八十九	百	百八十四	八十六	九十八	百八十九	八十五	百四	百四十八	六十六	八十二	百二十七	四十九	七十八	百十八	四十二	七十六	計	高等科
三十	四	二十六	十五	二	十三	二十四	九	十五	十九	二	十七	二十	二	十八	二十四	五	十九	十三	一	十二	一	
十四	二	十二	十九	六	十三	十七	一	十六	十四	十四	三	十六	十一	十六	十一	十一	十四	二	十二	十二	二	
四十四	六	三十八	三十四	八	二十六	四十一	十	三十一	三十三	二	三十一	三十九	五	三十四	三十五	五	三十	二十七	三	二十四	計	
二百四十二	九十七	百四十五	二百二十三	九十七	百二十六	二百二十五	九十六	二百二十九	二百二十二	八十七	百三十五	百八十七	七十一	百十六	百六十二	五十四	百八	百四十五	四十五	百	合計	

昭和三十三年度			昭和三十一年度			昭和二十九年			昭和二十八年			昭和二十七年			昭和二十六年			昭和二十五年			昭和二十四年			昭和二十三年			年度	学級数	性
計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男			
六十	三十三	二十七	三十八	十七	二十一	五十二	三十三	十九	三十三	十五	十八	十九	九	十	二十六	八	十八	三十六	十四	二十二	三十七	十九	十八	四十四	二十七	十七	一		
三十八	十七	二十一	五十八	三十一	二十七	三十二	十五	十七	十八	九	九	二十四	八	十六	四十九	十七	三十二	三十六	十八	十八	四十四	二十七	十七	三十七	二十一	十六	二		
五十八	二十七	三十一	四十二	十九	二十三	二十	九	十一	二十四	八	十六	三十九	十七	二十二	三十六	十八	十八	四十四	二十八	十六	三十九	二十三	十六	四十	二十二	十八	三		
七十一	三十八	三十三	五十一	二十九	二十二	四十四	二十	二十四	二十六	二十九	二十八	五十六	二十八	二十八	六十八	三十七	三十一	五十二	二十九	二十三	五十九	三十二	二十七	四十一	二十四	十七	四		
五十	二十二	二十八	四十四	二十七	十七	五十七	二十七	三十	五十六	二十八	二十八	六十七	三十六	三十一	五十一	二十九	二十二	五十八	三十二	二十六	三十九	二十一	十八	六十九	三十二	三十七	五		
三十四	十七	十七	四十一	二十一	二十	六十七	二十九	三十八	六十七	三十六	三十一	五十一	二十九	二十一	五十六	三十一	二十五	三十八	二十一	十七	七十	三十三	三十七	六十八	二十八	四十	六		
八十二	四十三	三十九	八十七	四十四	四十三	六十四	三十一	三十三	五十六	二十九	二十七	五十四	三十一	二十三	五十五	三十二	六十三	三十三	三十三	六十	二十七	三十三	三十七	六十三	二十九	三十四	分		
三百九十三	百九十七	百九十六	三百六十一	百八十八	百七十三	三百三十六	百六十四	百七十二	三百九	百五十八	百五十九	三百五十一	百五十八	百五十一	三百四十一	百七十二	百六十九	三百二十七	百七十五	三百四十八	百八十二	百六十六	三百六十二	百八十三	百七十九	合計			

尋常科

六 出席歩合

年度	男子出席歩合		女子出席歩合		男女出席歩合	
	尋常科	高等科	尋常科	高等科	尋常科	高等科
大正 三年度	八十七・九	九十三・七八	七十九・六九	九十七・五六	八十三・七九五	九十五・六七
大正 五年度	八十五	九十	六十五	七十四	七十五	八十二
大正 十年度	八十九・七二	九十七・二五	九十三・〇七	九十七・七三	九十一・三九五	九十七・四九
大正 十五年度	八十六・四六	九十三・五三	八十六・〇一	九十六・二七	八十六・二三五	九十四・九
昭和 二年度	九十・七一	九十四・九九	八十七・六一	九十三・〇一	八十九・一六	九十四
昭和 五年度	九十五・一六	九十七・九一	九十四・九四	九十八・五	九十五・〇五	九十八・二〇五
昭和 十年度	九十六・一八	九十七・四三	九十四・八八	九十八・一八	九十五・五三	九十七・八〇五
昭和 十五年度	九十六・三三	九十六・九八	九十七・二三	九十七・七二	九十六・七八	九十七・三五
昭和 二十年度	八十三・五三	七十九・六七	九十一・〇一	九十	八十七・二七	八十四・八三五
昭和 二十一年度	九十五・一二	九十四・七四	九十五・八七	九十二・〇二	九十五・四九五	九十三・三八

終戦後

年度	男子出席歩合	女子出席歩合	男女出席歩合
	昭和二十三年度	九十六・一八	九十五
昭和二十四年度	九十六・〇三	九十六・四四	九十六・二三五
昭和二十五年度	九十五・八四	九十七・三七	九十六・六〇五
昭和二十六年度	九十六・六五	九十七・〇五	九十六・八五
昭和二十七年度	九十三・五九	九十四・三五	九十三・九七
昭和二十八年度	九十五・四一	九十七・六四	九十六・五二五
昭和二十九年度	不詳		
昭和三十年度	九十三・五	九十七・二八	九十五・三九
昭和三十一年度	九十七・一一	九十八・一二	九十七・六一五

七、卒業者数

年度		性		数		累計		尋常科		累計	
昭和 五年度	女	男	女	男	二十一	五十七	五百六	六百八十七	尋常科	累計	
	男	女	男	二十六	五十六	六百八十七					
昭和 二年度	女	男	女	男	二十九	五十六	四百三十六	五百六十三	尋常科	累計	
	男	女	男	二十七	五十四	五百六十三					
大正 十五年度	女	男	女	男	二十八	五十四	四百七	五百六十二	尋常科	累計	
	男	女	男	二十六	四十九	四百七十二					
大正 十年度	女	男	女	男	十九	四十九	二百六十七	四百三十五	尋常科	累計	
	男	女	男	三十	四十七	四百三十五					
大正 七年度	女	男	女	男	十二	三十八	百九十七	二百五十六	尋常科	累計	
	男	女	男	二十六	三十八	二百五十六					

年度		性		数		累計		尋常科		累計		高等科		累計	
大正 五年度	女	男	女	男	十九	三十八	百六十四	四百七十二	尋常科	累計	数	男女計	男女別累計	累計	
	男	女	男	十九	三十九	三百八									
明治 四十五年度	女	男	女	男	十六	二十九	二百十七	三百六	尋常科	累計	数	男女計	男女別累計	累計	
	男	女	男	十三	二十六	八十九									
明治 四十年	女	男	女	男	四	十一	五十	百六十六	尋常科	累計	数	男女計	男女別累計	累計	
	男	女	男	七	十	百十六									
明治 三十五	女	男	女	男	七	十九	二十五	百一	尋常科	累計	数	男女計	男女別累計	累計	
	男	女	男	十二	十六	七十六									
明治 三十年	女	男	女	男	二	六	四	三十五	尋常科	累計	数	男女計	男女別累計	累計	
	男	女	男	四	四	三十一									
明治 二十五	女	男	女	男	〇	四	〇	四	尋常科	累計	数	男女計	男女別累計	累計	
	男	女	男	四	四	四									

二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十
尋常科					尋常科					尋常科					尋常科															
男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計															
累計					累計					累計					累計															
二千七百五十八					二千六百七十七					二千三百九十六					二千二百二十七															

二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十
尋常科					尋常科					尋常科					尋常科														
男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計														
累計					累計					累計					累計														
二千三百六					二千二百二十七					二千三百九十六					二千二百二十七														

三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
尋常科					尋常科					尋常科					尋常科					尋常科					高等科					高等科					高等科					高等科																											
男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計																																					
累計					累計					累計					累計					累計					累計					累計																																					
九百七十一					九百七十一					九百七十一					九百七十一					九百七十一					九百七十一					九百七十一																																					

二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
尋常科					尋常科					尋常科					尋常科					高等科					高等科					高等科																																												
男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計					男女別累計																																																	
累計					累計					累計					累計					累計					累計																																																	
七百九十二					七百九十二					七百九十二					七百九十二					七百九十二					七百九十二																																																	

1、ラジオの台数（聞く状況）

部落毎にどのくらいラジオを持って聞いているかを調べてみました。

昭和三十二年の九月三日現在の調査

年	部落							合計	戸数	聴取率
	山上	小倉	水根	下佐貫	佐貫	八日市	和奈見			
10								二百九	三十四	二六・四七
11								十一	三十四	二六・四七
12								二五	三十四	二六・四七
13								五	三十四	二六・四七
14								一	三十四	二六・四七
15								二	三十四	二六・四七
16								三	三十四	二六・四七
17								四	三十四	二六・四七
18								五	三十四	二六・四七
19								六	三十四	二六・四七
20								七	三十四	二六・四七
21								八	三十四	二六・四七
22								九	三十四	二六・四七
23								一〇	三十四	二六・四七
24								一一	三十四	二六・四七
25								一二	三十四	二六・四七
26								一三	三十四	二六・四七
27								一四	三十四	二六・四七
28								一五	三十四	二六・四七
29								一六	三十四	二六・四七
30								一七	三十四	二六・四七
31								一八	三十四	二六・四七
32								一九	三十四	二六・四七
他								二〇	三十四	二六・四七
合計								二〇	三十四	二六・四七

2、新聞を取って読んでいる状況の調査

各新聞の種類別に分けて集計した。

3、今日報道機関が大変進んできて、ラジオ・新聞の普及もよく、私たちの生活から切り離すことの出来ないほど必要になってきた。

種類	部落		山陰		日本海		その他		合計
	山上	小倉	山陰	日本海	その他	日本海	その他		
朝日	四	一	四	七	三	七	三	三	三十六
毎日	四	五	四	二	二	二	二	二	十五
読売	二	三	四	六	一	三	一	一	十五
産経	四	五	三	六	一	三	一	一	十五
山陰	四	一	二	二	一	三	一	一	十四
日本海	四	一	二	二	一	三	一	一	十四
その他	四	一	二	二	一	三	一	一	十四
合計	三十一	三十一	三十八	七	十一	四十四	四	百五十六	百五十六

三、進学状況

現在までの散岐小学校の数多き卒業者の中でどのくらい旧制の中学校や専門学校及び大学等に進学しているのか調べて見ようと思います。目下調査中ですので統計はのせません。今後も引き続き調査します。

四、後援会

昭和二十三年二月二十一日、散岐小学校PTAと変えられた。

五、歴代学校医

嘱託年月日	解職年月日	住所	氏名
明治四十二年四月十三日	大正五年十二月十五日	佐貫村大字佐貫	西山良一
大正五年十二月二十一日	死亡	散岐村大字佐貫	上村 恂
昭和十七年九月		国英村大字釜口	太田茂満
昭和二十一年四月		散岐村大字佐貫	奥田博久
	死亡	国英村大字釜口	太田茂満
		用瀬町大字用瀬	小林徳太郎
		散岐村大字佐貫	森田功昌
		散岐村大字佐貫	山田秀夫

歴史の部

郷土調査書

沿革（うつりかわり）

村の沿革

和奈抄という本に次のようなことが書かれています。八上郡に若桜（わかさ）丹比（たちひ）刑部（おさかべ）日理（わたり）日下部（くさかべ）私部（きさいち）土師（はじ）大江（おおえ）散岐（さぬき）佐井（さい）石田（いわた）曳田（ひけた）これだけの郷（ごう）があります。郷とは、今の村というのを昔は郷と言っていました。それから郡という字をごおりと呼んでいました。それですから八上郡と書いて『やかみごおり』と言っていました。今の八頭郡の中にもう一つ八東郡（はつとうごおり）というのがあったとも書いてあります。

散岐の郷

釜の口村

六日市、土居。戸数百二十五軒。辻堂三。太田大明神。氏神小田大明神。牛頭天王花龍山祿寺。王宝院。御制札幌。船があつて里堡、城の跡があります。上方街道高津原村の上十四町四十六間にあり、御制札幌があつて、民家が道の両側に連なり並んでいました。

八日市村

上土居、戸数三十軒。氏神妙見大明神。観隆院。城の跡。釜口の南向ひ、智頭川を隔てて西野や間際にあり、この村は寛文中までは散岐の枝村であつたが、その後別村となりました。しかし下村が今も散岐村の中にあつて貢ぎ物はこの村と同じようになっています。

散岐村

東村、西村、中村、水の尾、黒田。戸数百五十二軒。辻堂三。氏神十九社牛頭天王白鬚大明神。祭神諸尊郁波只知上の神社。神主国本さん。西野山盤瀧神。百丈大義寺武田三河守高信という人の位牌と家来と討ち死にした墓と高信が鎧を掛けたと言い伝えられる木があります。紫雲山円城寺城の跡があります。着物は花上があります。散岐村は八日市の西八町独活谷（うどだに）の国にあり、高津原の上向この大村でありまして、散のことをずっと昔には城原（しょうはら）又海石榴市（つばきいち）と書いていました。この事は日本の昔の本で『日本本記』という本に載っています。景行天皇の十二年にこの国に征伐に來られたときに、谷一つ木村に泊まって仮の家を建ててここに泊まっていて家来達と相談をしておられる時に次のようなことを言われました。「これから散岐（さぬき）に住んでいる土蜘蛛という悪者を退治に行く。土蜘蛛という悪者は山に穴を掘って住んでいるから、樁の木を切って土を作って沢山の兵隊に元気を付け、それから土蜘蛛の隠れている山の草や木を全部切り払いなさい。それから土蜘蛛を征伐しなさい」そうして散岐に住んでいた土蜘蛛という悪者は全部滅ぼされました。それでその時に住んでいた人は讚岐のことを樁の市と言うようになったし、またこの時に血が沢山流れたところを血田というようになったそうです。天皇は今度は猿を退治しようとしてたたらぎ山に行かれました。そしてまた散岐に帰って來られました。そしてここに留まって政治をされました。古い本にこう書いてあります。「天皇この地に至りまして一國を建て給う。その本源なりとて国本氏を称する者少なからず、これ皆のこの里の習わしなり」

これは今から千七百年も昔の出来事でありましたが、今もその事が残っているのですから、不思議なことです。そして散岐のお宮には景行天皇もお祭りしてあります。

小倉村

今西。戸数四十五軒。辻堂二。氏神松上大明神。山王大明神。産物。はながみ むしろ 竹 粟 柿 うど 蕨散岐の奥二十町南の山下にあり、こより奥山上村までを独活谷とこの村の人たちはむしろを沢山追って売りましたが、うど、むしろとしても有名です。山上村には坂を越えて十八町あまりでいけます。小倉には次のようなことがありました。

昔京都の叡山というお寺のお坊さんが味野の長者の所へ当供養のためのお金を寄付してください、と頼みに味野に行く途中の小倉まできて日が暮れてしまいました。そこで、叡山というお寺のお坊さんは、小倉の村の人々に「一番宿をして下さい」と頼みましたが、誰一人このお坊さんを泊めてあげる人がありませんでした。お坊さんは大変悲しそうな顔をして暗くなった山道をとぼとぼと歩いていってしまったそうです。

お坊さんはようやく味野の長者のところにとどり着かれたのですが、長者に叱られて京都にはどうとう帰らず野坂からずっと山奥に入り込んで松上の山の中に入って死んでしまわれました。

そのたたりがあったのでしょうか。長者は急に貧乏になってみんなにしたえてしまいました。

また小倉の人たちもこの坊さんのたたりがあるかもわからないと、大変恐れて、その事があってから松上にはいなくなりました。今でも松上からとれたものを食べると、たちまち腹痛を起こすと言っています。

水根村

追付（おおつき）へから長柄、荒鞍、小野江、中村、白目、湯坂、福田、戸数八十軒。辻堂二。氏神妙見社、追付大明神、同実取大明神、水根神社、万福寺。土産、小倉と同じ事です。この村は散岐村を奥にはいると山の尾鼻があつて、そこから右の谷に入ります。左に入れば今西村となります。

山の上村

戸数六十八軒。辻堂、氏神牛頭天皇。土産小倉水根と同じ事です。水根より右の谷奥に十五町ばかりのところにあり、独活谷の一番奥になります。村より西へ山越が出来ます。宇田の枝谷小河内村へ四十町本角材へ三十町ばかりであります。山神の産物は色々ありますが、中でもしんべいがきは実が少なく、味が大変甘くて美味しいので、よその人には喜ばれ方々に出していますが、この柿の作り方は山神の人が始めたと言われています。

和奈見村

戸数二十八軒。辻堂、氏神都波奈彌の神社。神主国本氏。城の跡。産物。竹、松、杉、栗、柿。独活谷と山を隔て南の谷にあり、その間に山を枡形の城という八日市より二十町ばかり上にあつて大川越しと向かい合っています。村の枝の南の山は智頭と八上郡の境であつて、その境まで十町あまりであります。智頭の美成村へ二十町、余地が背へ三十五町、釜口へ十八町であります。和奈見はお宮の名前を略していったので、都波奈彌村というところを簡単にして、和奈見というようになったという事です。

村のうつりかわり

釜口は散岐村の中に入っていました。

明治五年三月 水根、小倉、山上は一つの村であり佐貫、八日市、和奈見が一つの村となっていました。

明治六年二月 各部落に戸長役場をつくりました。

明治十二年 水根、小倉、山上が一塊になって水根に戸長役場を作られた。

和奈見は釜口役場にいきました。佐貫、八日市は一塊になって佐貫に戸長役場を作りました。

明治十六年 和奈見はまた佐貫に戻りました。

明治二十二年 佐貫と宇戸の二つの村に組合役場を作りました。

大正六年十月一日 佐貫と宇戸の二つの村が一つになって散岐村と新しい名前を付けました。

村の名前のこと

和奈見は昔和波と書いていました。山上は山野上と書いていました。和奈鈔には、八上郡の下に散岐郷と書いてあります。

寛文中、池田光仲の命によって国中の郷、庄保名を変えられました。ものには佐貫郷とあります。

元治元年の調査には散岐郷と書いてあります。文治三年 佐貫と改めたと書いてあります。

神社

私たちの村にはどんなお宮があるのでしょいか。

都波只知上神社（つばきちがみじんじや・佐貫字林の谷にまつつてある）

このお宮には昔くもす谷と言うところに土蜘蛛がいて人々を苦しめていたので、日本武尊のみこと、武内すくえを使わしてこれを退治させられた。
この人がお祭りしてあります。

都波奈彌神社（つばなみじんじや・和奈見の字村の内にある）

このお宮には素戔嗚尊、稲田姫の尊、として五男三女の神様がお祭りしてあります。

水根神社（水根の字の奥水根にある）

このお宮は実取大明神とも言われ、山、河、草、木、陽、水、風、土を守る神様としてお祭りしてある。昔このお宮のところから綺麗な清水が湧き出ていたことから、水根と言われるようになったとの事です。

石坪神社（佐貫字宮の前にある）

このお宮にはあまのほひのみこと、おおなむじの神など十九社の神々が合祭して保食神（百姓の作物を守る神様）としてお祭りしてある。

白鬚神社（佐貫の字広いにある）

祭神はいざなみのみことがお祭りしてあり、また白鬚大明神ともいわれている。※祭神Ⅱお祭りしてある神様の事。

八日市神社（八日市の字くもす谷にある）

祭神は素戔嗚尊とみずはのめがみを合祭され妙見大明神ともいう。

中村神社（水根の中村にある）

祭神は句々迺智神及び保食神みずはのめがみと合祭されている。大正十年三月二十二日水根神社に合祭されてある。

長江神社（水根の字宮田谷にある）

祭神はいざなみのみことがお祭りしてある。大正十年三月二十二日水根神社に合祭されてある。

小倉神社（小倉の字御堂の元にある）

祭神はおおなむじんの神を保食神としてお祭りしてあります。

山上神社（山上の字宮内にある）

祭神は素戔嗚尊。おおなじむのみことを保食神としてお祭りしてあります。

遺跡

大平の石室古墳

太平の古墳は大きな石で周りを囲んで大人が入れるような石ばかりの室が作ってあります。これは二千年ばかり前に死んだ人のかんを入れておいたところでありませう。宮内常吉さんの話によりますと、今から四十年ほど前にここを掘ったところが白い骨や壺が出てきたそうでありませう。みなさんのお父さんが子どもの頃の話ですね。この古墳は日本でもとても珍しい古墳だそうでありませう。今もこの古墳は残っています。

水尾城跡

昔、目黒伝之助という国侍がこの城に居たと言ひ伝えられています。

西耒寺跡

水根の西方、平地にあつて水尾城主目黒伝之助の位牌があつたと言われています。

米穴

欄背に家の大事な道具を隠しておいたもので、深さ横に二十数メートルもあります。

枅形城跡

和奈見の後、八日市の上にあります。本丸、二の丸、三の丸と段々に切平しています。はじめ福良氏が在城して後阿部喜内がこれを追索して城主になりました。福良は高草郡（今は新しく鳥取市になっている）に逃げ延びて行って土民となりました。四代後に宗太夫・宗介という兄弟があります。どういうわけか兄の宗太夫が喜内の家来になりましたから弟の宗介は怒って行方不明になってしまいました。永禄年中、武田高信が主家の山名を去って枅形の域に攻めて来ました。この城は大変攻めにくいように造ってあって、長い間落ちませんでした。高信の方がだんだん強くなつてとうとう攻め伏せられてしまいました。喜内は用瀬に逃げようとして途中隠れていた兵隊に捕まってしまったので、和奈見に引き返して谷間で自害しました。そこを自害谷といいます。その後その霊が祟るので、荒神として祭りしました。宗太夫は命は助かつて釜口に隠れて百姓になりました。子孫が今も続いています。

向羅の古墳

一昨年から果樹園に拓かれたところで土器十六個、鉄器八個、耳輪管玉九玉、馬具がでてきます。

綿俵古墳

ここは、下散岐土居の裏に墓地がありますが、その上の方にあります。土器がたくさん出てきました。耳輪も出てきました。

経瓦

八日市の西村太郎さんの果樹園の中から瓦の表面にお経を彫り込んだ瓦が出てきました。

これも全国でも珍しいもので、今京都の博物館に収められています。

徳大神さんの額

八日市の徳大神さんに額がかかっています。これは鳥取の殿さん池田重寛の長男霞五郎が病を得て苦しみました。その時、殿さんが病気が治るのを八日市の神さんに祈って寄進したものであります。書いた人は「松俊彦薫俗拝書」と書いてありますが、これは当時鳥取藩の書道家として知られていました中村元儀の事であります。

忠魂碑（大義寺山頂にあり）

建設 昭和十五年村会の議決により、当年七月工を起し同年十二月二十五日落成する。

碑石 高さ壹丈余 八頭郡社村（用瀬町）産の自然石

題字 陸軍大将 西尾壽造（鳥取県出身）

工事請負人社村 藤原勘藏

常世話人 散岐村 徳田常次郎

工費総額 貳阡五百余円

要人数 百八十日

従事進入員 当村 在郷軍人、警防団、青年団、婦人会、処女会、少年団、その他一般村民の労力奉仕による千二百人余り

建設地 百丈山（俗に大義寺山）

落成除幕式 昭和十五年十二月二十五日 午前十時より現地にて施行

昭和三十年 元陸軍有志 上り道に桜の木を植える

次に地下に眠る百入柱の英霊の名をとどめておこう。

伝記家譜

たけだたかのぶ

武田高信

高信の父は山城城といつて若狭国の浪人であった。天分以前に当国に来て山名氏に仕え、布施城主、山名豊定の臣となり、弟の又三郎は氣高郡王津の鶴尾城に居た。高信は山名氏にとつてかわろうとの野心を持つようになり豊定の子、豊数と布施城に攻め遂に豊数は破れて鹿野城に走った。そこで高信はひそかに美女をやり、豊数を毒殺してしまった。そこで、高信は一時鳥取地方の勇として名を売った。

天井元年、山名友和の子豊国の時に至つて、山中鹿之介と結び高信を改めた。高信は連戦連敗して遂に鳥取城を捨て、鶴尾城に據つた（此時弟又三郎は既に死去してなし）豊国は、父の仇を報ずるよい時とばかり、その頃不和だった新見城（智頭）の草刈をうつ、の口実で佐貫大義寺に奉陣を構え、自ら兵五六百を率い、家老以下出泪寺を父ま口に陣せしめた。そして計を案じ、高信に使いをやつて草刈軍との合戦について申し合やす事があるからと、大義寺迄おびき寄せ、いきなり門を閉め、以下の家在岸田豊後によつて遂に討たせてしまった。時に天正六年八月十七日。大義寺は高信が建てた寺であるから、今もその位牌が安置されている。『当寺用墓 大義院嚴桜三位 参議良岳英将大居士』堂の前に高信が胴甲を掛けたと伝えられる大檜の木があつたが、五・六十年前に伐つた。高信は時に五十歳。安西郷因幡が高信の一子源三郎は秀吉に仕え、鹿野城主となる。妻は高草郡艸衣神谷に隠れたが村民が殺してしまった。亡霊が出ると云うので村民はおそれ若宮に祈つた。

前田家之伝

水根の東側の山に水尾城趾がある。東西一町三十間、南北に十間余りの長方形の陣地があり、山頂には経凡壺町余りの円形城趾となっている。そして周囲に深さ一丈巾二間余りの壕を設けている。此の城に目黒伝之介が居た。その領地は近御はもとより、赤子田付近まで勢力範囲であった。天正の初め、鴨尾城主・武田高信にその所領を掠められたので、怒って鴨尾の城を攻めた。結果は全滅だった。通々内室が妊っていたので、老居大熊次郎左エ門、佐藤十助などがこれをかくまって程なく男子を生んだ。この子を興右衛門と名付け、その後裔が現主伝土口である。

人物譜

○国本道男氏の伝

道男は通称帯刀と云って、佐貫の都・波只知神社の宮主さんであった。幼い時より国学を学んで、後本居大平にも教えを受け大いに学問が進んだ。当時鳥取藩には国学として見る書きそのものがなく、何とかして此の道を盛んにしたいと願っていたのであるが、たまたま京都の古田の宿で衣川長秋と出会い、長秋と話し合った末、これを鳥取の地に迎えることが出来た。そして同職の飯田秀雄やその他有志と共に師事し、藩内に国学の振興する機械を作ったのである。後道男は、学熟を佐貫の地に開いて弟子の教育に力を尽くした。このためには家は貧乏し着る着物食べる一椀の米も無い位の事もあったが、もともと寡黙で清貧にせんじていた彼はそんなことに頓着せず、一心に国学の勉強と弟子の教育に励むと云う風であった。天保元年六月二九日、五十七歳で病のため没した。妻は飯田倍秀の女であり、国本道徳さんはその後妻である。

著者「皇国明」

「歌人俚歌（歌集）」 歌集散 して伝わらない

野 もろこしの国にありせば下野た郡須野は虎のふしどならまし

魚 とさのうみや おきつなみまの塩けぶり なにぞ と 問えば くじらなりけり

山餘花 山桜峯に残れるひと本の外にはまがう雲だにともなし

関 あう坂のすぎむら すぎ行くも 変えると いそぐ ゆうぐれの空

道男のため 飯田年平が碑文を書いたが、碑は今にして建たない。

国本翁は世の年おちつ方天保尤六月廿九日身まかられぬ

そもそも此御国学びのおこれる事は此の翁の巧によれり

そは寛政の頃なるべし、京の吉田の旅宿にて衣川翁にあいて

物かたちはれるを始めにてその後衣川翁の國に仕へられる事とは

なりにたり、学の親とかしつくなる

国本翁の萬まめにいそがしかりし事は其の私のなべての上に早くより公に

ねがい出づる事の有りけるを 心をくだき 力を書されし事 いとたやすぎ限り

にあらず 吾が父 翁はその志をつぎて いきの限り事とりて人をも励まされしが

今度もその流の人々の心書しとおろそかならぬに広く厚き君の恵

をかかふりてその事やうやうになり行く時とはなりにけり、あはれ共道々

年目に開けに行くに合わせて今のおふせ事のいとかしこく昔の巧いとたふとを

思ひ合わせてかくぞよめる

神習ふ道しるべの為の名も

時待ちてこそ 世に聞こえけれ

○県下ではじめて種痘したのは佐貫の人だった

記録によると種痘が鳥取県に入ってきたのは寛永三年（一八五〇）だそうだから、全国でも早いほうである。

藩の医者。松本玄泰と山田金江という医者が門人それぞれ一人連れ、長崎方持ち帰った。その帰り途中、佐貫村により村民の子にはじめて種痘をほどこした。

○西村秀碩氏

八日市に住んでいた医者、今から約百六十年程前、当時名医としてきこえ達筆でもあり書画を愛した

○田渕泰賢氏

寛永元年生まれ 本鹿より佐貫に転し開業した医者

○上村 恂（まこと）

気高郡松保村 上村順貞長男（明治十九、一、一生）

大正三年、東京済生医学校卒、東京病院で医術研究の後

若桜岩産堂より移り佐貫に開業した。

○田中熊治氏 佐貫出身

市は郡畜産連合に職を奉じ十有八年、一年の如く組合の経営に専心しその間 種牛の輸入及び畜牛の資質改良に実をあげ後村長、畜産組合評議員などの公職にも推され、始終一貫畜産の振興に協力して時の神田知事より表彰された。現在の散岐郵便局は熊治氏によつて開かれたものである。

○中村金四郎氏

佐貫に生まれ、中村家二世の祖、初世を金右衛門という。金四郎は元來心やさしく真面目に農を素としていたが、天保の頃母ふでが眼病をわずらい、百方医薬を求め、徹夜の看病をしたが治らない。一畑葉順（出雲）に参拝して、十七日食を断ち、母の合格を祈つたが、はかばかしくなかつた。そこで母の無理をなぐさめる為、親戚 家に母を背負い、又滋味を供して母の七七七色を見るのを唯一の楽しみとして至誠以て考養を尽くした。これが時の蔭云に聞こえて褒美を賜つた。米四年、銀一枚後金四郎元治元年の頃より、製陶事業をはじめ、瓦の製造を始めたが不況に遭い、明治四十年頃業を止めた。

現主 中村力蔵 昇太郎

○猪口兼治氏 明治 十二年十付三十一日生 佐貫出身

明治三十一年 佐貫・岩戸村組合役場を振出し、国中村助援・郡後所、鳥取県庁を経て高等官に任ぜられる。会計課長を経て退官、昭和九年初代智頭町長に選任せられたが、十七年散岐村長として帰る。全十八年五月会議中役場にて倒れる。六十五歳村葬を以て終わる。趣味ひろく、囲碁、文字、登山。毛筆の旅行記その高さ、四・五メートルに及ぶ。

○中土居の三兄弟

和奈見、下田弥平さんの家を通称中土居と呼ぶ。弥平さんに三男二女があつた。後三兄弟 ずるに及んで、三人揃って立派な人となつた。二女は社村、佐治村に嫁す。

○下田勘次氏 明治八年十一月四日生

鳥取中学を経て家事に従い、その間村会議員・郡会議員、県会議員を経て、大正九年、衆議院議員として選出。後民政党鳥取県支部長及び傾向を 県下政治の大御所であつた。

その間、和奈見用水の改修、和奈見端の架橋など、強度の開発の為力を尽くした。又趣味も広く、文芸、美術に関しても造詣が深かつた。

昭和十四年六十五歳で没す。

○下田光造氏 明治十八年三月十四日生

鳥取中学・第四高校を経て、東大医学部に入学・精神病学を専攻。卒業後大学院に入る。後東京府立巢鴨病院に入り此の間、東大・北大の備中、慶応大学医学部新設と同時に初代精神科教授・海外留学・帰朝後九大教授、同付属病院長及び医学部長を 役、定年退官後、米子医専校長、鳥取大学学長に推され、昭和三十二年退官。現在九大名誉教授。

著書「最新精神病学」「精神衛生諸話」

○田中信儀氏 明治二十二年三月生

鳥取中学、東京農科大学卒業後、農林省に入り、復帰後三谷、田中家の養嗣子となる。昭和六年県会議員に初当選、引き続き選出され、戦時より戦後にかけて参議院議員に選出されるまで、長年県会議員をつとめた。その間郡農会長、県農副会長、戦後は県水産会長となり、鳥取水産株式会社を創立し社長となる。現在 会長、目下病氣療養中。

○独学力行の志

当時高等支官の試験をパスすると云うことは、中々に至難のことであった。正規の大学を終えた人に於いても秀才にしてはじめて達し得るところである身は、高等小学きりの学 であり、独学よく此の難関をパスした人が二人ある。

○前田衛男氏 水根出身

現在東京に在り 少年裁判所判事

○下田三子夫氏 和奈見出身

地方裁判所検事

現在 鳥取市にて弁護士を開業中。

○梨の山本利平さん

東伯郡あたりかた梨の話でも出すと、あちらから山本利平さんの名を出されてびつくりする。八日市は夙くより梨の栽培をはじめ現在でも村内の指導的立場にあるが、その陰には山本さんのような熱心な努力家であつて力を尽くしたためである。氏の果樹園には他村よりの見学者が多い。

○山田枝官 厚志 明治四十三年七月十日生 山上出身

一昨年から、日本海新聞に「果樹栽培技術教室」とかで一年間連載され、斯界の人々かた絶賛をあげた。筆者、これが当時県専門技術室長時代の山田厚志氏であつた。氏は鳥取高農出身、会枝助教授など 使し現在日本で二人しか居ない。農林者農業改良普及官として北陸四県の農業改良普及事業指導のため活躍中

○前田宥昶僧上

先般、アジア宗教会議の日本代表の一人として東南アジアに飛び、又目下宗教使節として、ブラジル、アメリカに入つていられる人に本水根出身の前田宥昶氏がある。氏は七歳の時、医王山に上り、修行をはじめられた。現在は高 山の宗勢局長として宗派の中心的人物である。

○中山土建

バスで鳥取に出ると、智頭街道の舗装工事に必ず出くわす。此の工事をしているのが即ち中山土建。社長中山牧蔵氏（下佐貫出身）は男度胸と腕一本、現在鳥取に事務所を持ち、広く事業を営んでいる。

○村ではじめての女医さん 下田美ケ枝（現在佐々木姓）和奈見出身

当時まだ女性の自覚の程度も低かった状態であったのに、志して東京帝国女子医専に学び、卒業後日赤鳥取病院勤務、現在中井で開業中。

後記

此の郷土誌は郷土史ではない。どちらかと云うと「社会科教材資料郷土編」よ云った方が適當である。

これにかかった動機も目的もそこにあつた。早急の間にまとめた為不備の点が多いし、将来にわたって、

継続的に調査しなければならない事も多い。後日、あらためて改訂する。

郷土と云うのを旧散岐村に限定した。既に河原町郷土誌の編集の計画もあるし、県のはたぐさんあるので、そう決めた。

人物譜にはまだあると思うので執筆する考えである。

昭三十二、九、十、下田